

慶陵

東モンゴリアに於ける遼代帝王陵とその壁畫に關する考古學的調査報告

田村実雄 著

昭和廿八年三月 京都大學文學部刊

二五〇〇〇圓

第一卷 本文 二八〇頁

歐文 六一頁

第二卷 圖版 一四一頁

われ／＼は幸いペストの害におびやかされた経験がない。ところが異國遠の奥地において、宿營しようとしてようやくつてきた村について見ると何村では何人とペスト禍の情報が續々集つてゐる眞最中だつたとすれば誰しもギョツとするに違いない。全速力でトラックをとばして逃げだすことにしたが、それでもネズミがトラックにひそんではいぬかと氣が氣でない。……降りつゞく豪雨で氾濫する河川、泥濘をついて苦しい前進が續く。或時は米の補給がうまく行かず、粟一食の空腹で一日辛抱せねばならぬ日もあつた。

ごく平凡な場合であつても凡そ調査と云うものにはとかくつきまとつてくる支障、そこで強いられる忍耐、少しでもそれに経験のある人ならば、この調査がどれほどの苦勞を重ねて遂行せられたものであるかは容易に察せられよう。目的地は東蒙古巴林左翼旗管内、白塔子部落の西北約一四キロメートルにある山坡で、通稱ワール・イン・マンハとよばれてゐる地點に造營された遼代三帝王の陵墓である。この遺跡の所在は早く一九二〇年ミユリ師によつて報ぜられ、一九二三年にはケルザイン師がその墓中より得た契丹文字の哀

冊を發表して學界の注目を集めたが、更に一九三〇年にはわが鳥居龍藏博士が踏査して墓中に殘る勝れた壁畫を紹介し、この遺跡に對する内外學者の關心はいよ／＼高まつてその詳細な調査がしきりにのぞまれるようになった。たゞし五代から宋代にかけて北方に榮え、當時に於ける最も強力な雄國として北方民族の歴史にかゞやかしい名をとゞめてゐる遼に關しては、その人種や言語の系列、彼等が創作したと云う文字の問題をはじめなお不明な點が多く、しかもこれほど有力な資料はいままで發見された例がなかつたからである。

しかし何分にも容易に近づき難い遼の奥地であるため調査はなかなか／＼果され得なかつたが、一九三九年(昭和十四年)に至つて著者等は日滿文化協會の意をうけて調査隊を組織し惡條件をおかして僅少の時日ながら多大の成果をあげられたのであつた。こゝに公にされた豪華な二大巨冊はその報告書であるが、調査の日からはまさに十五年ぶりである。この間、戰禍は熱心な努力によつてようやく仕上つた資料の整理と研究の成果とを出版過程の半ばにおいて焼拂つてしまつたが、この災害にもめげず著者等は再出發して苦闘をつゞけ、今こゝに貴重なこの二大冊を仕上げられたのである。その努力と熱誠とに對して、まずわれ／＼は深い敬意を表したいと思う。

さて、八角七層六五メートルをこえる白亜の塔塔がそびえ立つ白塔子の部落は、遼國がもつとも榮えた聖宗の永慶陵のために奉陵邑とされ、興宗の永興陵・道宗の永福陵の奉陵邑をもかねて遼代を通じて富饒繁榮を誇つた慶州の地である。そしていま調査を見た東西にならぶ三陵こそは、この三帝を葬つた陵墓に他ならないが、それらは最初に營造された永慶陵にもとずき慶陵と總稱される。しかも聖宗・興宗・道宗といへば、九代二〇〇年間北方で雄をとなえた遼の

歴史においても、最も國力が充實し文化も榮えたその最盛期に當るが、而も今われ／＼が見ようとするものはその帝王の陵墓である。従つてそれは遂に關する限り第一級中の第一級、まさにその代表的な遺跡でなければならぬが、本報告書がもつ價值はまずこの點から考えられなければならない。しかし残念ながら本調査に先立ち、一九三〇年の夏には熱河省の軍閥であつた湯佐榮氏が人を派して東・西の二陵墓を大規模に開掘し、皇帝・皇后の哀冊碑石はじめ副葬品を運び去つてしまつたので、著者らが調査した時には殆んど遺物はなく、若干残つていた木製品の斷片等が當時いかに荒々しく開掘が行われたかをもの語つていと云つた慘憺たる有様であつた。しかし幸にも優秀な壁畫は好箇の資料として残つている。陵墓の構造規模も重要である。こゝに於いて著者らは壁畫のある東陵の調査にまず主力をそゝいだが、治安状態はさしせまつて惡化してきたため中陵・西陵は略測にとゞめざるを得なかつた。

しかし注意したいことは、實はこの貴重な壁畫すら既に危険に頻しつゝあつたことである。なぜならば例の開掘の日からこれら陵墓は開口している。しかもこゝは嚴寒の地であり、調査が行われた八・九月でも墓室内部はわずかに二乃至四度に下り、厚く防寒衣に身をかためても一時間以上は居たゝまらなかつた云う程であつて調査の勞苦も察せられるわけであるが、地下九乃至十一メートルに造られたこの墓室に流れこむ外氣は壁面に水氣をため、冬はそれが下地の漆喰もろとも凍結して、遠慮なく凝固力を弱めてゆくからである。著者らが調査を行つていた間にも剝脱した斷片は、たえず無氣味な音をたて、床上におちて行つたと云う。一九三〇年の鳥居博士の寫眞と比べても九年のあいだに剝落は著しく進んでいる。おそらく今頃

は見るかげもなくなくなつてゐるのではないかと聞くと、それが優秀な壁畫であるだけに惜しまれてならないが、著者らの苦心努力によつて今こゝにこうして立派な記録が出來上り、それらが永久に湮滅をまぬかれ得たことを思えば、われ／＼は心から感謝せざるを得ない。本書がもつ重要な意義についてはもはや改めて云うまでもないが、次に紙幅の許す範圍においてその内容の概要をのべてみよう。

まず、東陵の構造は木造瓦葺の拱門をそのまゝ、磚築で摸した羨門を坑道の前面につくつてゐるが、これを入れれば羨道となり、それにつゞいて方形プランの前室、その奥には中室さらに後室がある。この中室・前室には左右に側室がつくられてゐるが、これら六室の間を結ぶ通廊及び羨道・前室の天井はカマボコ形であるのに對し、他の六室はドーム形天井をなし、そこに漢代以來の傳統がなお見られるのは興味深い。羨門は埴積みで閉鎖し、各室の入口には頭丈な木隔屏があつたわけであるが、これらは荒々しく切開され壞されてしまつてゐる。そして後室は曲材を積み重ねて木造内壁を組んでゐたらしいが、この他の室や通廊の壁面、更に羨門外の坑道左右壁には厚く漆喰を塗り、その上に前記の誠に注目すべき壁畫がえがかれていたわけである。そこで次にはこの壁畫についてその大要をのべよう。

壁畫の主題をなすものは七十体以上にのぼるほど等身大の人物と、中室の四壁を飾る四季の山水圖とであるが、このほかにも柱や斗組・桁梁等木造建築に於ける賦彩を再現した加飾が施され、天井部にもはなやかな化粧文様が加えられてゐる。その人物には幘頭を着、漢服をつけたものと無簷帽を着、契丹服をつけた、見るからに頭丈重厚な感じのする人物とがあるが、これは最もわれ／＼の興味をひ

くところである。そしてその作風から云うならば、人物の中には形式的な表現法をもつものも多少見うけられるが、大部分は十分寫實的に成功した立派な肖像畫であつて、各人の体臭すらそこから感ぜられるほど生々としている。しかもすべての人物は皇帝・皇后の柩をおさめたと思われる奥室の方に向つて侍立する姿にえがかれており、服裝によつて武官・文官・樂人等のいることが知られるが、このほかに二婦人もおり、彼等はそれ／＼の官職地位に應じて羨望から奥へと居並んでいて、こゝを訪れるものはさながら遼の宮廷にまよいこんだかと思ひ誤るばかりである。しかし何と云つてもわれ／＼の目をひくのは、元來からその人種系統が問題となつてゐる契丹人らしい人物の風貌であるが、その頭高はひく、顔面は廣い。頬骨は目立つて高いが、鼻すじは通り、深い鼻翼溝の下には引締つた厚い口唇が意志的な口もとをむすんでいる。頭髮は黒い直毛と思われるが鬚をのはしてゐるものが多く、また細長く鋭く外背のやゝつり上つた眼は威嚴のある端嚴さを示し、蒙古皺襞がはつきりと見うけられる。太く短い首、堂々たる軀軀、こゝにえがき出されるものは誠に重厚な修揚せまらない北方偉丈夫の泰然たる姿である。

次に山水畫はよき獵場であると共に避暑地として、聖宗はじめ遼の皇帝が親しんだと云うこのあたりの山、即ち陵墓が營まれている慶雲山の景色をえがいたものかと思われるが、春夏秋冬四季のうつり變りに應じて地形もそれにふさわしい場所をえらび、花木の變化はもとより鹿や野猪の生態に見らるゝ四季の變化を巧みにとらえていて、誠によく時候の感覺をもち上げている。従つてそれは山水畫でありつゝ、動植物の描寫にも重みがかゝつてゐると云う點では花鳥畫である。またその表現には遠近大小を無視し、草木や土坡のえ

がき方、雲の描法にも觀念的なものが見られるが、こゝで特に注意したいことは類型的な土坡のくりかえしによりつゝ、構圖と點景とを變化することによつて自然の景觀を繪畫的にうまくまとめているその手法である。これは雲烟によつて中景を陰蔽し、奥行きへの表現をこゝろみると云つた水墨畫などによく用いられてゐる手法とは異つて、なお古い傳統の中に根ざしてゐるものとすべきであらう。また夏の圖の牡丹に見られる裝飾畫的な表現もなお唐の畫風をうけてゐるのに對し、秋の圖には宋代の水墨畫につながるものを示してゐるし人物の表現にも傳統的形式的な筆致を重んずるものと宋畫に見らるゝような潤達な比較的新らしいものとが見られる。しかもこれらがえがかれたのは全く同一時期に屬してゐるからそれは畫風の差と云うべく、こゝに遼代畫壇の動向がそのまゝ反映されてゐるのは誠に面白い。

以上壁畫について特に興味をひいた諸點をのべてきたが、著者はこのほかに壁畫製作の手法から顔料・服飾等の細部にわたつても詳しい考察を加へ學ぶべき多くの事實をあげてゐる。しかしこれらについては殘念ながら割愛して先を急がねばならない。

著者は次に東陵の地表上に於ける遺構と遺物をのべ、陵前約二〇〇メートルにある前殿址、更に約一三〇〇メートルはなれた前門址、これらの遺跡で採集した綠釉瓦・白磁・青白磁・青磁・ソバ釉・黒釉の陶器等を詳説し、室内から得た遺物に及んでゐるが、わずかの木片を丹念に觀察研究して室内につくられていた小建築物の軒まわり斗組みの部分の復原された努力に對しては全く敬服の他はない。また著者は更に宋の李明仲の營造法式に見らるゝ木割法と比較考察し、遼代建築技術の性質をたゞすと云つた極めて周到な研究的態度

をとられていることも注意しておきたい。中陵・東陵もその地上の設備、墓室の構造、遺物の大体に於いて、たゞ各室が圓形でなく八角形で規模も一段と大きく、西陵の入口をのぞき壁畫の存在が認められぬことの外は大して違いがないが、中陵の前殿址には白大理石の陀羅尼石幢が残存していたことは特記すべきであろう。

最後に、早くケルヴィン師によつて發見され學界の注目をあびた哀冊文に關しては、その後、湯佐榮氏が大發掘を行つて墓中におさめられた哀冊碑石を殆んど運び去つてしまつた。これらは幸い著者田村教授によつて再發見され、本書にはこれまでに知られた慶陵出土の漢文・契丹文でかゝれた哀冊文がすべて集録せられてゐるが、またその碑石・碑蓋のすべてにわたつても構造から華麗な裝飾に至るまで詳しく説明が加えられてゐる。漢文で書いた哀冊文については著者はこれに詳細な釋讀を加えたが、それらは遼史に關する從來の誤りを正し、また新しい歴史的事實を明らかにした點で注目すべきものがある。また契丹文の哀冊に對しては、すでにケルヴィン師が發表した興宗・仁懿皇后の哀冊文について羅福成・王靜如兩氏が解讀をこゝろみたが、それは同じ帝（または后）の事蹟についてかいた漢文と契丹文との兩方の哀冊を對比して解讀せんと企てたものである。しかし兩者は言語構造を異にするうえ、記述された内容にも相違があるようでなか／＼うま／＼はかどつてはいない。そこで著者等は言語學的にこの難解な文字と取りくむ難事業に敢て着手しようやく解讀しうる端著をつかむところまでこぎつけられた。その方法は契丹文字が二乃至七の原字の組合せからなる一語を現していることに着目してこれを分解し、かくて檢出して約三〇〇種にわたる原字についてその頻度をしらべるかたわら契丹語がその系統に

屬すると考えられる中世蒙古語を漢字で表記した元朝祕史や韃靼館譯語等の書物についてしらべ、この二書に見る各音節の頻度を檢出して前者と比較すると共に蒙古語の接尾語と中世蒙古語の接尾語とを照合してゆく方法であつて、かくてその音價を推定しえた若干個の原字は別表二葉として本書に添附されてゐる。このような方法によつてこの難解な文字文章もやがて解讀される日の遠くないことが期待されるわけであるが、こうした研究には天理大學の山崎忠氏、神戸市外國語大學の長田夏樹氏の助力があつたことを述べておかねばならない。

なお本書冒頭には懇切な羽田博士の序文がかゝげられてゐるが、「契丹人の容貌・服飾等の如きはこれによつて始めて如實に知ることができるのであり、かゝる容貌の人々の活動した契丹の社會に、かかる風趣の美術の愛翫せられてあつたことを在りしまゝに認むるだけでも從來の契丹史觀の上に可なりの見直しの要を感じるもの、ひとり二三子の間にのみ止らないであらう」と云う先生のお言葉を拜借してレジメともつかぬこのまゝい紹介をむすぶことゝしたい。

(岡田芳三郎)